



角川建

「八甲田山」への出演依頼があった時のことは、とても鮮明に覚えています。青山墓地の近くにある「ウエスト」という喫茶店で、橋本プロの橋本忍さんにお会いしました。「どうして徳島大尉が、僕なんですか」と尋ねたら、「砂の器」の蒲田での深夜ロケの時に、「そろそろ『八甲田山』の配役を決めなければいけない」と言っていて、何人かの候補の方の名前を書いた名札をテーブルの上に出したら、森谷監督がみんなの名札を次々に裏返しにしていって、最後に僕のだけが残ったそうです。

「徳島大尉役は彼しかありません」

この一言でこ一緒しよう、と瞬間に思いました。しんどい仕事だとかは、ずっと後で考えたことです。その時は、自分に飛んできた白羽の矢の決まりように感動してそう思ったんです。実はその時点では「八甲田山」の原作をまだ読んでおりませんでしたが一。

その当時は、東映で年に一〇本とか一五本の作品をやるということを何年も続けていた時期で、一つの作品にかり切りでやってみたい、という想いも強くありました。どうしてこの厳しい仕事をあえて引き受けたか、と問われてもよく分からないのですが、やつぱりその時、どれだけ自分がその役に望まれているか、自分に対する望まれ方の問題だと思います。自分が仕事を決めるとき、そういう決め方が多いです。

大体ロケ中は、朝四時半くらいに起き、装備をつけて、六時には旅館の前での点呼が始まってました。始どの朝食、夕食、どうかすると夜食の三食とも雪の中で、腰まで埋まりながら食べることもありました。カレーライスのご飯が凍って、シャリシャリ音を立てていたことも記憶しています。壮絶なロケーションでした。

欣也君の遺骸に向かった時のラストシーンは、ロケセットで撮影したんですが、しんと雪が降り、テント造りの死体安置所の護衛兵士、奥さん役の栗原小巻さんの気遣、このシーンを撮ろうとするスタッフの「気」のようなものを深く深く自分の心に感じ、自然にそういうふう（編注：健さんはこのシーンで本当に涙を流していた）になりました。

この映画は、自分が長年育てていただいた東映から出た作品でもありましたし、森谷司郎という類い希な硬質の監督との出会い、毎日毎日、積雪四、五尺の中を雪中行軍していくという、あれはまさしくドキュメンタリーのような撮影でした。暴動が起きてもおかしくない、演習中の自衛隊の人や、地元の営林署の人たちもあきれほどの厳しい条件の中で、皆の気持ちが一つになればああいう撮影ができる、皆の気持ちが一つになる、ということの強さを教わった気がします。

「続・網走番外地」では港、「海峽」は竜飛崎でロケしましたが、青森はやはり「八甲田山」の時のしんと降り積もる湿気を含んだ重い雪、暗いイメージ。僕にとっては「切ない」です。青森の人たちには、忍耐強く、それでいて弾けるような「ねぶた祭り」のエネルギーに象徴される、燃えるような想いを内に秘めている「そんな印象があります」。

また、仕事でお世話になることもあると思います。どうぞよろしくお願いします。

